【「見える！！地域連携」プロジェクト】学生ニーズの可視化

学生による公募型地域連携活動への助成事業「学まちチャレンジ！プロジェクト」

本事業は、本学学生から応募される主体的な地域連携活動に対し助成を行うものです。
学生の地域社会における多様な学びを支援し、自主性・企画力・課題解決能力・コミュニケーション能力を培い、その活動をもって、地域貢献や大学活性化、学生文化の向上につながるように実施するものです。

募集対象　地域社会への貢献を目的とした取り組み（対象地域は京都市内に限る）
応募資格　本学の正規学生（学部生、大学院生）で原則３名以上のグループ

2021 年度採択団体一覧

NO.	チーム名	プロジェクト名	概要
1	Reha Papers（リハ　ペーパーズ）	スマホをひらくその時間が、リハビリの勉強に！	リハビリの知見発信サイトを開設し、世界中から発信されているリハビリの知見をライターとしての協力者が意訳し、記事として、手軽なコンテンツを目指し発信するプロジェクト。
2	えしかるず橘	エシカルマルシェ	山科エシカルズが行っている「山科エシカルマルシェ」に参加し運営を行うほか、山科川の清掃活動、京都市内のエシカルマルシェの実態調査などを行う。 エシカルマルシェ…SDGs を意識した商品を販売する企画。
3	居場所づくり支援学生団体	クリスマスリースで居場所を作ろうプロジェクト	山科区における高齢者事情の調査を京都市のデータベースなどを用いて行い、クリスマスリース作りのワークショップの準備、開催を行う。また、アンケート集計を行い高齢者のニーズを把握する。
4	歴史遺産学科考古学コース有志	「アートロードなぎつじ」出展 ―橘生が挑戦する山科歴史再発掘―	京都市営地下鉄椥辻駅改札前の展示スペース「アートロードなぎつじ」において、山科区内の遺跡から出土した遺物を中心に、山科区の歴史と文化をわかりやすく解説したパネル４～５枚とともに展示する。
5	まちづくり研究会	音でつながる高齢者の居場所	地域の高齢者を対象に、役立つ情報・家での過ごし方・学生との交流機会・心身の健康などをコンセプトとした交流会を開催。体操や料理、音楽などを企画する。
6	とんだたぬき	山科冬季えんげき計画 2021	山科区北花山 臨済宗妙心寺派華山寺を会場とし、山科を舞台にした紙芝居を演劇用の台本におこし上演を行う。演劇を接点としたコミュニティの形成を目指す。
7	山科に行くっ！	「いつか山科いこう」～山科駅前から山科の魅力情報を発信するプロジェクト～	山科の観光・魅力スポットの現地調査を行い、山科以外の方に山科の魅力を伝えるパンフレットを作成。学内や山科駅で配布を行い、山科の魅力を発信する。

学まちチャレンジ！プロジェクト

スマホをひらくその時間が、リハビリの勉強に!

Reha Papers(健康科学研究科院生有志)

プロジェクトの内容

地域連携センター公認学生団体「Reha Papers」は、京都を中心に地域連携活動に関心を持つ大学院健康科学研究科の博士前期と博士後期から集まった学生による団体です。

最新の知見は英語論文に多いですが、英語の論文まで読むセラピストは少なく、良い知見があっても患者さんに還元されるのは時間がかかってしまっています。

そこで、９月から「スマホをひらくその時間が、リハビリの勉強に！」をプロジェクトのテーマとして、京都で活躍する若手のリハビリ関連職である理学療法士（PT）や作業療法士（OT）、言語聴覚士（ST）に向けた最新の有意義な知識を発信するリハビリ関連職向けの専用サイトの開設を企画しました。

５人の博士課程、修士課程、認定療法士のメンバーの協力を得て、講師の指導のもと、リハビリ関連の英語論文を意訳して記事としてサイトに掲載しています。

プロジェクトの成果と学び

若手のセラピストを対象としていたので、プログラマーの方と協議し、通勤中や通学中、休憩中に閲覧してもらえるようにパソコンのみではなく、スマホから見てもらえるようにシステムを工夫しました。

その成果として、9月1日から週2回、月8回の頻度で延べ35記事を載せました。そして、現時点で149名の方に、472回、1113記事（平均4分18秒）を閲覧して頂きました。また、リハビリ関連職は知識のアップデートに積極的であるものの、コロナ禍の影響もあり、若手セラピストに臨床で活用できる知識を提供するような取り組みはまだまだ少ないことが分かりました。

今回の取り組みをとおして、頭の中で考えていたことを実際に形にし、閲覧数などの数値で結果を確認することができました。また、京都のリハビリ関連職のみなさんにこういった専用のサイトがどのくらい必要とされているかを確認できたことは大きな経験になりました。

今後の展開

リハビリ専用サイトに私たちが面白いと思う英論文を記事にしても、必要としてくれる方に見てもらえないと意味がないことに気づきました。今後は、私たちが伝えたい内容ではなく、ユーザーが知りたいと思っている内容の記事を載せて取り組みを継続していきたいと思います。

今回の取り組みをとおして、京都内に限らず若手セラピストのスキルアップを目的としたリハビリ知見サイトの取り組みはまだまだ少ないことが分かり、次年度以降、プロジェクト内容の再考やメンバーの役割の明確化、新規メンバーの獲得、今回の企画を通して得た運営ノウハウを新規メンバーへの引継ぎなどを行い、さらに活動を推進していきます。

まずは、今年度制作したリハビリ専用サイトに新しい内容の取り組みを展開していきたいと思います。そのため、協力して頂ける方との連携を強化し、新たなチャレンジを進めていきたいです。

Reha Papers
―スマホを開くその時間が、リハビリの勉強に―
https://rehapapers.com/

学まちチャレンジ！プロジェクト

エシカルマルシェ

えしかるず橘(歴史遺産学科・児童教育学科・経営学科・都市環境デザイン学科・心理学科有志)

プロジェクトの内容

このプロジェクトでは、京都府や京都市などが推奨している「エシカル消費」の活動として、地元マルシェとその他イベントを複合させた活動を行いました。

近年、地球環境や人・社会への配慮を意味する「エシカル」という言葉が聞かれるようになり、エシカル消費の活動が世界でも広がっています。世界中から商品やサービスを手に入れることができるようになり、それがどこで、どのように作られたものかを知らずに購入することが多くなりました。身の回りにある商品の向こう側では、社会や環境に負担を与える生産や廃棄が行われていることがあります。持続可能な社会を作るためには、私たちの暮らしが、社会・環境・地域に影響を与えていることを理解することが大切です。しかし、エシカル消費への認知度が低く、実際の実践活動はまだあまり進んでいない状況です。このような中、エシカルマルシェを通してエシカル消費を広め、地域住民のエシカル消費や環境問題への意識を変えるきっかけを作りたいと考えました。

山科区内でエシカルという言葉や習慣を広める活動をされている「山科エシカルズ」と連携し、エシカルマルシェの運営を行いました。また、山科区内のショッピングセンターにおいて、地域住民、特に小学生を対象にした牛乳パック紙すき体験、エコバッグ制作ワークショップを同時に開催し、楽しみながら環境のことを考えてもらう場を提供しました。

プロジェクトの成果と学び

第１回　10 月 9 日（土）　エシカルマルシェと紙すき体験
第２回　11 月 27 日（土）　エシカルマルシェとエコバッグ制作ワークショップ

第１回の紙すき体験では約 40 人の方にご参加いただきました。材料の牛乳パックは、山科の飲食店の皆さんにいただいたものや、学生の家で出たものを使用しました。

第２回のマルシェとエコバッグ制作ワークショップは本学の大学祭で行いましたが、用意した商品は完売し、エコバッグも100枚配ることができました。エコバッグ制作ワークショップでは、イラストを描いたり、ハンコを押すなどをしてオリジナルエコバッグを制作してもらいました。参加者からは、「楽しかった」や「とても助かる」などと言っていただきました。

この活動に携わったことで、エシカル消費を身近に感じることができ、普段の行動を見直すきっかけとなりました。イベントを企画していく中で、様々な視点から物事を見て、考える力がついたと感じています。また、多くの人と関わり、連携する必要があり、とても大変でしたが、良い経験になりました。加えて、実際に地域に出て活動できたことで、新しい価値観に触れ、山科の魅力や課題について考え、多くのことを学ぶことができました。

今後の展開

今回の活動をとおして、活動の認知度の低さが課題だと感じました。様々な地域の方々が活動をされていることを知りましたが、私たちが知らなかったように、学生や地域の方々がエシカル消費に関わる活動自体を知らないため、広報や広告などを工夫する必要があると感じました。また、地域で活動している方々、活動したい方々は多いものの、交流・参加する機会が少ないため、発展しにくい状況なのではないかと感じました。

今後、エシカル消費に関係するイベントを行うだけでなく、楽しく、交流ができるイベントを考えていきたいと思います。その一つとして、これから無印良品京都山科様と協力して交流ができる清掃活動を企画しようと考えています。さらに、新たなまちづくりネットワークを広げていけるような企画を検討していきたいです。

紙すき体験

エコバック

エシカルマルシェ（本学学祭）

学まちチャレンジ！プロジェクト

クリスマスリースで居場所を作ろうプロジェクト

居場所づくり支援学生団体（国際英語・歴史学科・経済学科・作業療法学科有志）

プロジェクトの内容

山科区は京都市内で２番目に高齢化率が高い地域です。このことから、山科区内の高齢者の孤立を少しでも減らすために、私たちは高齢者のコミュニティづくりに貢献したいと考えました。そこで活動の目的を①高齢者孤立の予防②高齢者に新しい文化に触れてもらう③山科の高齢者事情の把握　の３つに設定し、クリスマスリースづくりのイベントを企画しました。

しかし開催に向けた準備を進めるなか、新型コロナウイルスの第５波の到来を主な理由として企画が白紙となり、ターゲットを含めて計画を見直すべき状況となりました。

季節感を感じられるイベントやコミュニティが広がるようなイベントの開催機会が減っていることを受けて、クリスマスリースイベントは開きたいと考えたため、イベントの対象者を全年齢に変更しました。

イベント開催まで短期間であり、またメンバー全員が１回生であったことから、イベント運営に長けている本学まちづくり研究会と一緒に活動していくことで、短期間で企画立案から準備、イベント開催まで進めていくことができました。

プロジェクトの成果と学び

・第１回　12月11日（土）13時～16時　イオンタウン山科椥辻　参加者46名
・第２回　12月18日（土）11時30分～13時　西本願寺山科別院　参加者約15名
※第２回は、まちづくり研究会が開催する他イベントと共同開催

第１回のイベントに参加してくれた方がイベントに興味を持ってくださり、第２回のイベントにも参加していただきました。その方はこのようなイベントがどこで開催されているのか知れる場所が欲しいとおっしゃっていました。参加者で多かったのは親子連れでしたが、高齢のご夫婦など幅広い世代の方にも楽しんでもらえるイベントになりました。

今回の取り組みをとおして、グループ内の他のメンバーと協力して意思疎通と情報伝達をしっかり行うことの重要性を学び、１つのことを達成する力を身に付けることができました。先のことを想像したうえで準備をすすめていくことで、突然の出来事にも柔軟に対応することができることも学びました。子どもや高齢者の方が、何か困っていたり、何か聞きたそうにしている場合、積極的にこちらから話しかけ、コミュニケーションをとっていくことが大事なことも取り組みを通して知ることができました。このプロジェクトに取り組んだことで、コミュニケーション力、統率力、判断力等の問題解決力を養うことができたと感じています。今回の反省点としては、スケジュール関係の段取りや連携が上手くいっていなかったことが挙げられます。メンバー内での情報の共有をもっと強化すべきだったと思います。

今後の展開

現状では、新型コロナウイルスの影響でイベントを開催する機会が減り、地域のコミュニティが狭まってしまっているのではないかと思います。今後、地域住民へのイベントの提供とともに新たなコミュニティ形成を目的としたイベントを開催できるよう検討していきたいと考えています。

リースづくりの様子①

リースづくりの様子②

リースづくりの様子③

学まちチャレンジ！プロジェクト

「アートロードなぎつじ」出展

－橘生が挑戦する山科歴史再発掘－

歴史遺産学科考古学コース有志

プロジェクトの内容

学芸員の仕事の１つに、「文化財の展示」があります。文化財の展示は、地域から検出された遺跡や遺物を、その地域に住む人々に伝える役割があります。今回、考古学を学ぶ私たちが学芸員の仕事を主体的に学ぶために、椥辻駅で山科区から出土した遺物の展示を行いたい、という声をあげ、メンバーを集めました。そこで京都市考古資料館・(公財）京都市埋蔵文化財研究所・山科区役所と協働し、学芸員の仕事にもある展示作業を学生中心に実施することにしました。

山科区民をはじめ、多くの人に山科の長い歴史と文化を知ってもらいたい、という思いと私たちが学ぶ「型式学」という考古学の基本となる方法と学びの成果を発信したく、このプロジェクトを立ち上げました。

プロジェクトの成果と学び

文化財の展示は、資料調査、展示パネルの作成、物品の購入など、展示作業以外にもたくさんの仕事があります。

今回、学生が主体となり京都市考古資料館にて資料選定、伏見水垂収蔵庫にて資料調査を行い、椥辻駅にて展示替えを実施しました。このような学芸員の基本となる学びの経験を培うことができ、学生自身の力を養うことができました。また広報活動では、京都市山科区の公式アプリである「山科プラス＋」への掲載が行われたこと、さらに、山科区内で活動されている「ふるさとの良さを活かしたまちづくりを進める会（ふるさとの会)」と連携した企画を検討し準備をすすめてきました。今回はコロナ禍で実施にはいたらなかったものの、今後に活かせる関係づくりができたことは成果であるといえます。

今回、展示内容の企画から、資料調査、展示品の選定、説明パネルの作成、展示作業まで、学芸員の仕事の一部分を体験することができました。考古学の方法論の一つである型式学について、わかりやすく伝わるような展示構成を意識しました。例えば、土器の口縁部の形状の変化に着目しやすいように、土器を並べる順番や展示する角度をメンバー全員で相談しながら調整しました。展示ケースの周りは薄暗く、目立ちにくいため、展示手法を学び新しい展示構成を考えることも今後の課題の一つだと感じました。

毎月の掃除では、完全に密閉されているように見える展示ケース内にも新しく埃が溜まっており、継続的なメンテナンスの必要性を強く感じました。このようなことは実際に清掃活動に携わらないと気付きにくいことであると思います。また、京都市考古資料館の山本館長や、山科区役所など学外の方と協力する機会も多く、大学の中では得られない交流も生まれたと思います。

今後の展開

目下の課題としては、展示ケースの存在を駅の利用者にアピールすることです。展示ケースの周りは薄暗く、ケース自体も低い位置にあるため、人通りは多くても注目を集めにくいのが現状です。また駅構内の防犯上、ケース外に物を置くことが難しいので、展示ケース内の工夫によって人目を引く展示を作っていきたいと思います。具体的には展示用のライトや明るい色の背景パネルを設置することなどを考えています。

また、展示を見た人の反応を得るため、アンケート用紙を記入してもらうことやパンフレットの配布などを検討していましたが、接触を避けるため実施できませんでした。今後、ＱＲコードを経由して感想をもらうといった非接触型の方法も考えていければと思っています。

今回、コロナ禍により予定していたふるさとの会との連携を実現できなかったので、新型コロナウイルスの流行が落ち着けば、展示ケース前での説明や講演会、その他のイベントなどで地元の人々とも交流していきたいと思います。また、地域の小学校や区役所と協力することでより広く活動を知ってもらえるように努めていきたいです。

展示作業①

展示作業②

展示：弥生土器とその変化

学まちチャレンジ！プロジェクト

音でつながる高齢者の居場所

社会・工学系学会　まちづくり研究会有志

プロジェクトの内容

伏見区醍醐地域に住む高齢者の交流や健康促進を目的に、知育楽器である「ドレミパイプ」を用いてイベントを行いました。本来は本学と協定関係にある京都市営醍醐中山団地の住民の高齢化・孤立化が進行していることを受けて企画されたプロジェクトでしたが、新型コロナウイルスの蔓延により醍醐中山団地でイベントを開催することが困難となりました。そこで醍醐いきいき市民活動センターの方々の協力を仰ぎ、同センター内高齢者ふれあいサロンにてイベントを開催する運びとなりました。

イベントの具体的内容は、歌謡曲の楽譜を用意し、学生の補助を交えながら参加者同士でドレミパイプを演奏するというものです。参加者の募集方法として、開催場所の醍醐いきいき市民活動センター職員の方から醍醐に住む高齢者向けにダイレクトメールを送信してもらい、イベントの開催を予告する方法をとりました。醍醐中山団地を舞台に据えていた時とは違い、醍醐に住む高齢者という広すぎる範囲でどう参加者を募るか思案していたところ、醍醐いきいき市民活動センター職員の方からこの方法をご提案いただくことができました。

プロジェクトの成果と学び

今回のプロジェクトでは、交流や健康促進を目的に醍醐いきいき市民活動センターで２回イベントを行いました。１回目の参加者は４名で事前予約が２名、飛び入り参加が２名でした。

当日は呼ばれたい名前を紙に書いてもらい、その名前で呼び合いながらドレミパイプに挑戦しました。楽譜を見ながらドレミパイプを叩くことは難しく、初めこそ手いっぱいという印象でしたが、参加者は繰り返し練習するにつれて慣れて余裕が出てきたように感じました。最終的にはピアノ伴奏と合わせて完奏することができ、表情からも楽しさが読み取れました。２回目の参加者は５人で、１回目に続いて参加してくださった方が４人、新規の参加者が１人でした。１回目と同じく、呼ばれたい名前を紙に書いてもらい、その名前で呼び合いながらドレミパイプに挑戦しました。どちらのイベントでも感想を聞くと「小学校の合奏を思い出した」「頭の体操になった」「とても楽しかった」という嬉しい言葉をいただき、さらには参加者同士で友達になるという、新しい関係作りの促進に繋がりました。

また、12 月にはこども食堂にじいろキッチン（西本願寺山科別院）のイベントに参加させていただき、「ドレミパイプ」「ハンドベル」の演奏体験コーナーを行いました。予め用意していた練習曲をはじめ、流行りの１ 曲、ベルならではの曲など、参加者の方々には思い思いに演奏していただきました。感想を聞くと「音楽を楽しめた」「初めて見る楽器で面白い」「懐かしさを感じた」などのあたたかいコメントをいただけました。また、イベントに参加している初対面の人同士で１つの曲を演奏するといった場面があったため、交流の促進にもつながったのではと感じました。

これらの取り組みから、コミュニティ形成における音楽演奏の有用性の高さを再確認できました。高齢者の交流を目的としたプロジェクトを運営するにあたり、代替案として接触を抑えられるドレミパイプ演奏を用いて企画を進めましたが、参加者から知っている曲を演奏することの楽しさ、会話を交えることなく参加者同士で生まれる一体感が評価されたことにより、楽器演奏だからこそ成り立つ交流会もあるのだと学びました。コロナ禍に限定せず、今後も新たな交流方法として楽器演奏を用いることを提案したいです。

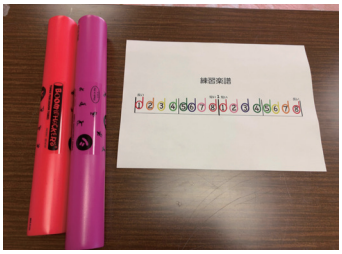
今後の展開

今回のプロジェクトを通して課題だと感じたところは、主に２つあります。１つ目は参加者のニーズに応え、学生が参加者の方にどれだけ寄り添ってイベントをできるかということです。具体的には、今回のプロジェクトではドレミパイプを用いましたが、演奏するにあたり楽譜を読むのが得意な人と苦手な人、初めての人など参加者の間で個人差があるということに気づきました。また、周りの方と話すのが得意な人、そうでない人がおり参加者同士が交流するにあたり、参加者全員が楽しんでもらえる環境を作ることに苦戦し、今後改善していく点だと感じました。

２つ目は、より多くの方にイベントのこと、醍醐いきいき市民活動センターという場所を知ってもらいコミュニティの幅を広げていけるかということです。。全２回同センターにて行われたイベントですが、２回とも参加者の方がほぼ同じという結果になりました。１回目のイベントを通して参加者同士の仲が深まり、２回目には、一緒に参加されるケースがありました。このイベントに参加していただいたことをきっかけに、新たな人間関係が生まれたことは大変良いことだと感じます。しかし、元々は住民の高齢化・孤立化が進行していることを受けて企画されたプロジェクトであり、よりコミュニティ外に出てもらい、たくさんの方と関わり合い、コミュニケーションを取る場を設けることが目的であったため、１回目と２回目の参加者が同じメンバーとなってしまうことは課題に感じた部分であり、今後改善していく点であると考えます。

醍醐いきいき市民活動センターでの様子

にじいろキッチン
（西本願寺山科別院）での様子



ドレミパイプと練習楽譜

学まちチャレンジ！プロジェクト

山科冬季えんげき計画 2021

とんだたぬき（演劇部有志）

プロジェクトの内容

とんだたぬきは、京都橘大学演劇部「劇団洗濯氣」所属部員を中心に構成された演劇団体です。１月末に、山科区に所在するお寺を会場に、演劇公演を実施することを目標としました。新型コロナウイルスの流行により、演劇をはじめ舞台芸術は８割の業界損失を受けるなど、大きな打撃を受けています。また山科区では、演劇公演を実施する劇団や事業者が見られません。

そこで本企画は、山科区における演劇文化の浸透及び山科地域への関心向上を目的として設定しました。山科区に関連する作品を演目とし、山科区民にとっては馴染み深く、山科区外の京都市民にとっては山科区に興味関心を抱くきっかけとすることを狙いとしています。また、本公演の会場「華山寺」のご住職はかねてより京都橘大学との連携を希望してくださっており、本企画を通じて華山寺と京都橘大学に繋がりを持たせ、次代においても演劇を通したコミュニティづくりが継続されていくことを目指しました。

プロジェクトの成果と学び

①１月 29 日（土）13 時～
②１月 30 日（日）11 時～／ 16 時～

来場者数は 29 日 (土) で 21 人、30 日 (日)11 時で 25 人、16 時で 25 人、２日間３ステージでの本公演の総来場者数は合計 72 人でした。新型コロナウイルス対策により座席同士に一定の間隔を設けて設置しました。各回最大 29 席の客席数であったため、２, ３ステージ目はほぼ満席に近い集客でした。

公演に足を運んだきっかけとして最も多かったのは「関係者からの紹介」（30 件）で、華山寺関係者や劇団関係者からの紹介が多くありました。華山寺は地域の方に向けて、除夜の鐘撞きや餅つき、座禅体験といった催しを頻繁に行っておられ、その参加者へ住職直々に公演を紹介されたことが、大きな動機となっていると考えられます。２番目に多いのは「ＳＮＳ」（14 件）で、本公演ではTwitterを利用し広報を行っていました。関西の演劇関係者に広く周知され、来場につながったと考えられます。また、本公演は 2022 年１月 15 日発刊「市民しんぶん山科区版」第 313 号に掲載されました。掲載記事がきっかけとなったのは 11 件で、３番目に多い結果となりました。以上から、本公演は山科区民に多く来場されつつ、ＳＮＳを通じ山科に接点のない人にも来場していただけたことがわかりました。そのため本企画の目的及び狙いは達成したといえます。これまでは演劇部内や関西小劇場界隈でしか活動しなかった演劇を、山科を会場に実施することで、演劇が果たす地域への働きかけに少なからず寄与したものと考えます。本企画を通じ山科が舞台である小説の存在を周知したり、華山寺を通じ普段では関わらない地域の方との接点が生まれました。

今後の展開

設立時点では３名であった公演メンバーは、公演時点で９名となり、その他当日の運営協力、企画遂行の上での助言など華山寺のご住職をはじめ数多くの方にご協力をいただきました。

今回のようなプロジェクトを継続的に実施するには、あらゆる担い手の参画と、それぞれの主体性の向上が必要となると考えます。京都橘大学の学生と華山寺に接点を持たせることを狙いに、本公演の当日運営は劇団洗濯氣の１, ２回生を中心に依頼しました。昨今の感染拡大状況を背景に、劇団洗濯氣では有観客公演の実施許可が下りない現状にあるため、本公演の運営は貴重な機会となりました。会場で来場客と直に接することで、危ぶまれる劇場の存在意義の再認識や上演意欲の刺激を通し、今後に渡っても再び華山寺を会場に演劇公演を実施することにつながるものと考えます。また、本企画は「ふるさとの良さを活かしたまちづくりを進める会（ふるさとの会）」や「山科三条商店会」、華山寺との関係から山科図書館長にも周知されました。多方面の団体や共同体と関係を構築する華山寺を会場とすることで、多様なコミュニティに興味関心を持っていただくことができました。こうしたきっかけを丁寧に発展し劇づくりに活かせば、作品の魅力向上や実行可能性の拡大につながるのではないかと考えます。本企画を通じ得た個人、団体との接点を、山科区をフィールドに活動する京都橘大学の学生という立場から活かすことで、他にはない独自性に溢れた企画を継続的に実施することが可能になると考えます。

稽古の様子

会場の華山寺本堂

出演者集合写真

学まちチャレンジ！プロジェクト

いつか山科いこう

～山科駅前から山科の魅力情報を発信するプロジェクト～

山科に行くっ！（歴史学科・経済学科有志）

プロジェクトの内容

現在、新型コロナウイルスの流行により観光が制限され、停滞しています。その影響で、山科の魅力に関する情報を発信する場や機会が少なくなっています。そうした状況の中で「いつか山科に来てくれる」ように、山科観光の起点である山科駅付近の魅力情報を山科内外の人に発信しようという目的で今回のプロジェクトを企画しました。

まず、山科駅周辺の魅力的な店や神社仏閣を調べ、リスト化し、その中から自分たちが取り上げたいところを選びました。そして、選んだところへ取材に行き、写真撮影を行いました。成果物としては、気軽に手にとって見てもらえるようにＡ４サイズのリーフレットを作ることとしました。デザイナーと協力しながらリーフレットのデザインを考え、取材した内容をまとめた原稿と撮影した写真を当てはめ、リーフレットを完成させました。リーフレットは大学で学生や教職員にむけて配布し、またその他に大学内の掲示スペース、取材にご協力いただいた寺社やお店、山科区役所に配架させていただきました。

プロジェクトの成果と学び

コロナ禍ではありましたが、無事に取材を行うことができ、山科に携わる方々の生の声をお聞きできたのは非常に貴重な経験となりました。また、取材に応じてくださった方々やデザイナーの方など多くの人たちの協力を得て、活動を進めることができました。活動の最後に行った配布・配架で、大学や取材に応じてくださった方々にリーフレットを渡すことができ、また、家族や友人などにも配布を行い、多くの人たちにリーフレットを行き渡らせることができました。今回リーフレットの作成・印刷にデザイナーの方が協力してくださいましたが、デザイナーの方にお任せしたことで、自分たちが携われていない部分があったことが今回の活動の反省点です。

このプロジェクトによって、山科に関する情報の収集や取材を通して今まで知らなかった山科の魅力について理解を深めることができました。また、情報を集めてのリスト化や取材アポイント、そして実際に自身がインタビュアーとして取材したことなど、初めて経験することが多く、うまくできるか不安がありましたが、それらのことを通して情報の収集や整理の効率的な方法、相手とのコミュニケーションの取り方などを身に付けることができました。

今後の展開

今回のプロジェクトで作ったリーフレットをシリーズ化し、次回からは今回のプロジェクトのリーフレットで載せたところとは別の店や神社仏閣、他に伝統品や特産品、行事などを載せていきます。また、作成したリーフレットをネット上やＳＮＳ、専用のアプリに載せて、より多くの人に見てもらえるようにしたいとも考えています。今回のプロジェクトではＡ４サイズ裏表１枚のリーフレットでしたが、今回の経験を活かして、次回以降、パンフレットやガイドブック形式にして、より細かく山科の魅力を取り上げられるようにもしたいです。

デザイナーとの話し合いの様子

完成したリーフレット